

# フランシスコ・デ・ゴヤ

## ——啓蒙の黄昏と自由主義の夜明けの間で——



自画像(1773-74年)



自画像(1815年)



Vicente López Portaña画(1826年)

### 【参考文献】

ジャニス・A・トムリンソン(立石博高・木下亮共訳)『ゴヤとその時代——薄明のなかの宮廷画家』(昭和堂、2002年)

# ゴヤの生涯(1)

- 1746年 3月30日、サラゴース近郊フエンテトードスにフランシスコ・ゴヤが生まれる。
  - 父ホセ、錬金師
  - 母グラシア・ルシエンテス(郷土の血を引く)。
- 1753年 ゴヤ、ピアリスト会の学校に入り、生涯の友マルティン・サパテルと出会う。  
※サパテル(サラゴースの裕福な実業家になる)宛のゴヤの手紙(1771年~世紀末)
- **1759年8月 カルロス3世の即位、啓蒙的改革に着手。**
- 1760年 ゴヤ、サラゴースの画家ホセ・ルサンのアトリエに学ぶ(14歳)
- 1762年 ゴヤ、この頃から職業画家として活動
- 1763年 ゴヤ、サン・フェルナンド王立美術アカデミーの奨学生試験に失敗
- **1766年 「エスキラーチェ」暴動が起こる。**  
※ゴヤはマドリードの街頭でこの政治的・宗教的激変を目撃したと思われる。  
※この頃からイタリア留学までのゴヤの生活は不明。自由奔放な生活?「若い頃、闘牛をやったことがあります、剣を手にしたら怖いものはない」(後のモラティン宛の手紙)
- 1770年 ゴヤ、この頃イタリアに留学。
- 1771年 ゴヤ、サラゴースに帰り、エル・ピラール大教会の壁画に着手。

## ゴヤの生涯(2)

- 1774年 ゴヤ、宮廷画家フランシスコ・バイェウの妹ホセーファと結婚、マドリッドへ移住。
- 1775年 ゴヤ、サンタ・バルバラ王立タピスリー工場でカルトン(原画)制作の仕事始める。
- 1777年 ゴヤ、「日傘」を制作。この年、病床に伏す。

※この頃から、ゴヤは新しい王宮(1765年に完成)の王室コレクション(ベラスケスの絵を含む)の絵画の銅板複製の作業に関わる。

⇒版画家ゴヤ(『気まぐれ』『戦争の惨禍』『闘牛』『妄』)

- 1778年 ゴヤ、ベラスケスの作品を模写、その版画13点を出版。
- 1779年 ゴヤ、「陶器売り」を製作。

※「ぼくはこの御三方(国王、王太子、王太子妃)の手に接吻した。いままでに決して味わったことのない幸福だ……」(1779年1月、親友サパテル宛の手紙)

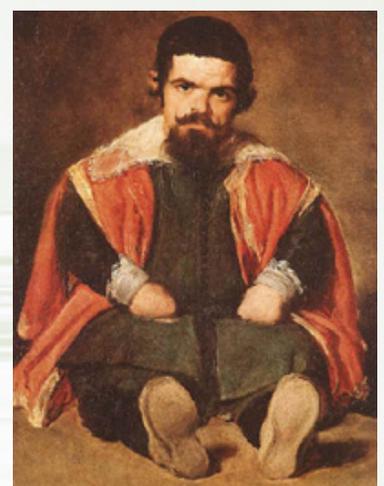
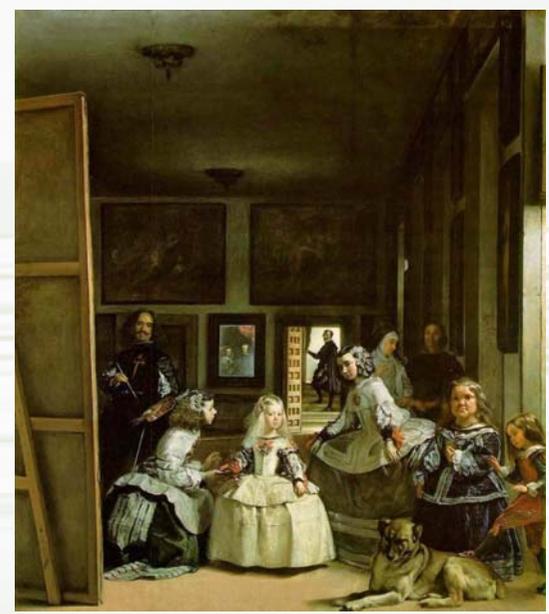
- 1780年5月 「十字架上のキリスト」の制作により、ゴヤはサン・フェルナンド美術アカデミー(1752年に設立)の会員に推挙される。
- 1780年 サラゴースのエル・ピラール大寺院の天井画「殉教者の女王」の制作に着手。この作品をめぐる義兄バイェウとの対立が始まる。

※「しかるべき品格に欠けている」として修正を求められる。



*«Velasco, y grande del cuadro original, de D. Diego Velázquez, en que representa, al vivo, en el Cuadro del Rey Felipe IV, por D. Francisco Coello, pintado en el Real Palacio de Madrid...»  
C. de 1779*

「自分には3人の師匠がいた。自然とベラスケスとレンブラントだ。」



Sebastian de Morra  
Diego Velásquez, 1645

## ゴヤの生涯(3)

- 1783年 ゴヤ、「フロリダブランカ伯爵」、「ドン・ルイス親王の家族の肖像」を制作。この頃から、貴族社会との関係が始まる。
- 1784年 長男フランシスコ・ハビエルの誕生
- 1785年 ゴヤ、サン・フェルナンド王立美術アカデミーの絵画副部長に任命される。
- 1785年 オスーナ公爵家の知遇を得る。肖像画「オスーナ公爵夫人」の制作。
- 1786年 ゴヤ、カルロス3世の「王付き画家」に任命される。エル・パルド離宮のためのタピスリーの原画「秋」、「冬」(四季の連作)を制作。
- 1787年 この頃、「狩猟服姿のカルロス3世」を制作。
- 1788年 「サン・イシードロの牧場」、「オスーナ公爵の家族」、「ドン・マヌエル・オソーリオ」を制作。この頃、サン・カルロス銀行創設に関与した一連の貴族たちの肖像画を制作。

## ゴヤの生涯(4)

- 1788年12月 カルロス3世が死去、息子カルロス4世の即位。
- 1789年 ゴヤ、国王カルロス4世の宮廷画家に任命され、新国王夫妻の肖像画を制作。
- 1789年7月14日 バスティーユ襲撃。フランス革命が始まる。
- 1791年 「わら人形遊び」、「村の結婚式」を制作。
- 1792年 ゴヤ、カルトン制作の仕事を辞す。
- 1792年10月 ゴヤはサン・フェルナンド王立美術アカデミーに美術教育に関する意見書を提出。
- 1792年 秋にアンダルシアを旅行中に原因不明の重病(髄膜性脳炎だと思われる)に見舞われる。
- 1793年 ゴヤ、病気のために完全に聴覚を失う(46歳)。
- 1793年夏 マドリードに戻り、仕事を再開。

## サパテル宛の手紙(1789年5月23日)

「僕には4歳の息子がいる。マドリードの街で見かける子供の中でも一番美しい子だ。この間病気にかかって、僕は生きた心地もしないほど心配したが、幸いなことに今はよくなった。きみは商売の才能に優れているから、10万レアルをどこに投資すればよいか教えてくれないか。銀行か、王債か、同業組合か、ともかく、いちばん利益の見込めるところを……。」

# ゴヤの生涯(5)

- 1794年 ゴヤ、連作「民衆の気晴らし」11点をサン・フェルナンド王立美術アカデミーに送る。「ラ・ソラーナ侯爵夫人」。
- 1795年 義兄バイエウの死により、ゴヤは美術アカデミー絵画部長に就任(～1797年)。
- 1795年 この頃、アルバ公爵家との交際が密になる。「アルバ公爵」、「アルバ公爵夫人」の制作。
- 1796年5月末 ゴヤ、二度目のアンダルシーア旅行。
- 1796年6月 アルバ公爵没。
- 1796年 ゴヤ、サンルーカルのアルバ公爵夫人の別荘に滞在(病気の静養)。

# ゴヤの生涯(6)

- 1797年 ゴヤ、美術アカデミー絵画部長を辞し、名誉部長に推挙される。
  - 「黒衣のアルバ公爵夫人」制作。
  - ゴドイ邸のための寓意画4点に着手。
  - この頃、啓蒙派や進歩的知識人・政治家と交わり、彼らの肖像画を描く。
  - 版画集『夢』の制作に着手。
  - オスーナ公爵夫人の別荘「エル・カプリーチョ邸」のための魔女をテーマとする作品6点を制作。
  - カディスで劇作家モラティンと交流。
  - この頃2点の「マハ」に着手(※)
- 1798年 サン・アントニオ・デ・ラ・フロリーダ聖堂のフレスコ画「パドヴァの聖アントニウスの奇跡」を制作。

## ゴヤの生涯(7)

- 1799年 版画集『ロス・カプリーチョス(気まぐれ)』を出版、数日後に発売停止。この頃、国王や王妃の肖像を多く制作、首席宮廷画家となる(年金5万レアルと馬車維持費に500ドゥカート)。
- 1800年 「チンチョン伯爵夫人」、「カルロス4世の家族」、「バルコニーのマハたち」
- 1800年 この頃、「食人種」を制作
- 1801年 「マヌエル・ゴドイ」
- 1803年 ゴヤ、『ロス・カプリーチョス』の原版と初版本を国王に献上(※)。
- 1804年 この頃、「フランシスカ・サバーサ・イ・ガルシア」、「イサベル・デ・ポルセール」
- **1808年** **スペイン独立戦争の開始(～1814年)**
- 1808年 ゴドイの財産目録に2点の「マハ」が記載される。ゴヤが、「巨人」を制作。
- 1810年 版画集『戦争の惨禍』の制作に着手。「マドリード市の寓意」を制作。

# ゴヤの生涯(8)

- 1811年 ゴヤは妻のホセーファとともに遺書を作成。ホセ1世より王室勲章を受ける。
- 1812年3月19日 カディス憲法の公布。 ※「スペイン、時間、歴史」
- 1812年 ゴヤの妻ホセーファ没。この頃、「鯛の埋葬」、「精神病院」を制作。
- 1813年 この頃からゴヤはレオカディアと同居。
- 1814年5月 フェルナンド7世の絶対主義的復位。
- 1814年12月 「マハ」の件でゴヤは異端審問所に訴えられる。
- 1814年 「1808年5月2日」、「1818年5月3日」、「野営中のフェルナンド7世」を制作。
- 1816年 ゴヤ、版画集『ラ・タウロマキア(闘牛)』の出版
- 1819年 ゴヤ、2月にマドリード郊外に別荘「聾者の家」を購入。3度目の大病に見舞われる。

## ゴヤの生涯(9)

- 1820年～1823年 自由主義の3年間
- 1820年 この頃から『黒い絵』を描き始める。
- 1821年 この頃、版画集『ロス・ディスパラーテス(妄)』を制作。
- 1823年 フランス軍のスペイン侵攻。フェルナンド7世の絶対王政復活。
- 1823年 「聾者の家」を孫マリアーノに譲渡し、ゴヤはドウアーソ神父のもとに身を隠す。
- 1824年6月 ゴヤは自由主義派への弾圧を恐れて、ボルドーへ亡命(78歳)。パリにも滞在。

※名目上は、フランスでの病気治療。

- 1824年9月 ボルドーに戻り、レオカディアとこの地で過ごす。石版画集『ボルドーの闘牛』を制作。

## ゴヤの生涯(10)

- 1825年 ゴヤは病気のために身体を自由を失う。この頃、「ボルドーのミルク売り娘」を制作。
- 1826年 ゴヤ、一時マドリッドに戻り、宮廷画家を辞職。
- 1826年7月 ゴヤ、ボルドーへ戻る。
- 1828年 ゴヤ、半身不随で床に伏し、4月16日に没す(享年82歳)。  
(遺体は、1919年にマドリッドのサン・アントニオ・デ・ラ・フロリーダ聖堂に改葬される。)

# フエンデトードス

<http://www.fuendetodos.org/>



# 「マルティン・サパテル」(1790年)



# 「エスキラーチェ暴動」(1766-67年)



# 王立タピスリー工場(1721年に創設)



# 「日傘」



# 「陶器売り」



# 「十字架上のキリスト」



# エル・ピラール大寺院の天井画「殉教者の女王」



下絵

# 「フロリダブランカ伯爵」



# 「ドン・ルイス親王」



# 「ドン・ルイス親王の 家族の肖像」



のちのチンチョン伯爵夫人

# 「オスーナ公爵夫人」



# 四季の連作



# 「狩猟服姿のカルロス3世」



# 「サン・イシードロの牧場」



# 「オスーナ公爵の家族」



# 「ドン・マヌエル・オソーリオ」



# 「カルロス4世」



# 「マリア・ルイサ」



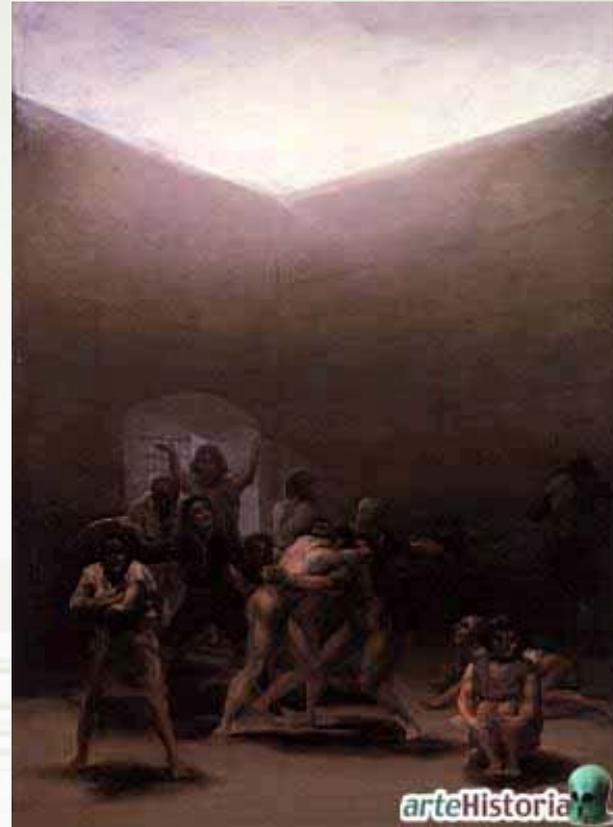
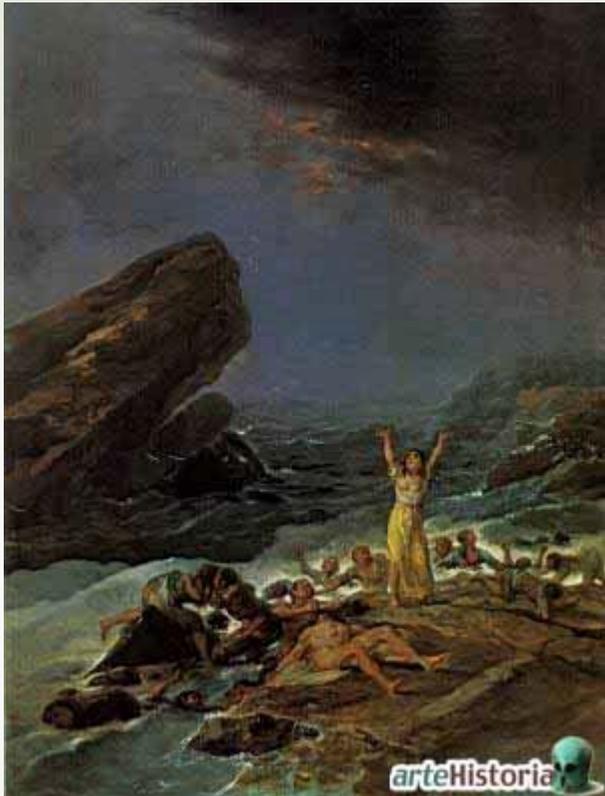
# 「わら人形遊び」



# 「村の結婚式」



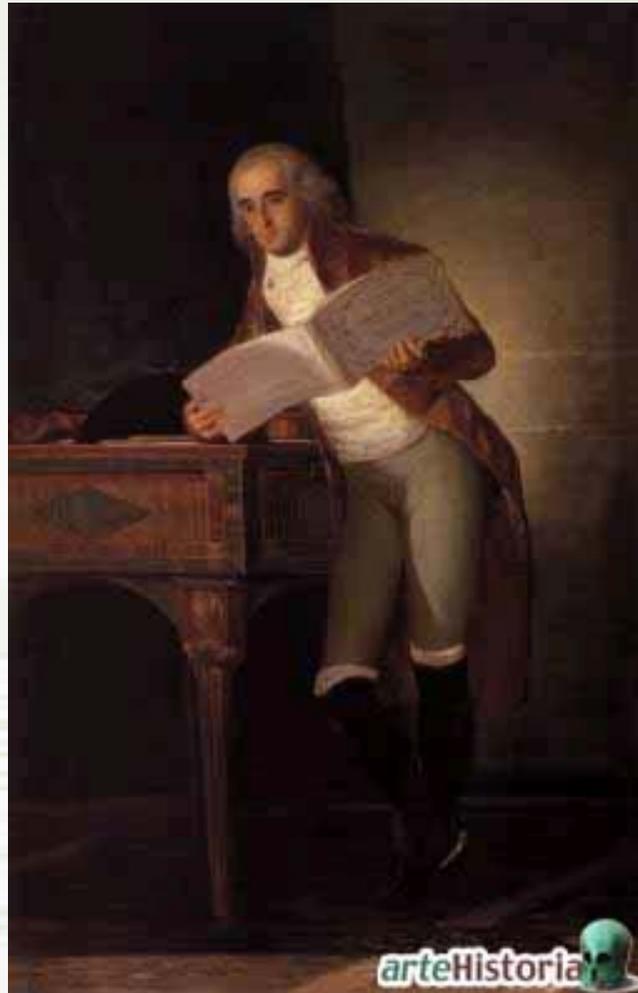
# 連作「民衆の気晴らし」より



# 「ラ・ソラーナ侯爵夫人」



# 「アルバ公爵」



# 「アルバ公爵夫人」





***Duquesa de Alba con su  
dueña o La Duquesa de Alba y  
la “beata” (1795年)***

# 「アルバ公爵夫人」(デッサン) 1796年



# 「黒衣のアルバ公爵夫人」



Alba / Goya

Solo Goya

arteHistoria



# 「裸のマハ」



# 「着衣のマハ」





# 「裸のマハ」をめぐって

- 異端審問所による嫌疑

1815年3月16日の文書

《ドン・フランシスコ・デ・ゴヤが、(ゴドイ邸)から押収された二枚の絵……そのうち一枚は寢床に横たわる裸の女性……いま一枚はマハ(小粋な女)の服装で寢床に横たわる女性……の作者であることを鑑み、当該人の作品であるか否か、いかなる動機により、いかなる人物を、いかなる目的のもとにそれらの絵を制作したかを知らしめるために、上記ゴヤなる人物に当法廷への出頭を命じるべきと判断する。》

※サン・フェルナンド美術学校に運ばれて、厳重に保管される。

※この名画がプラド美術館に展示されるのは、1900年代になってからである。

# サン・アントニオ・デ・ラ・フロリーダ聖堂のフレスコ画 「パドヴァの聖アントニウスの奇跡」

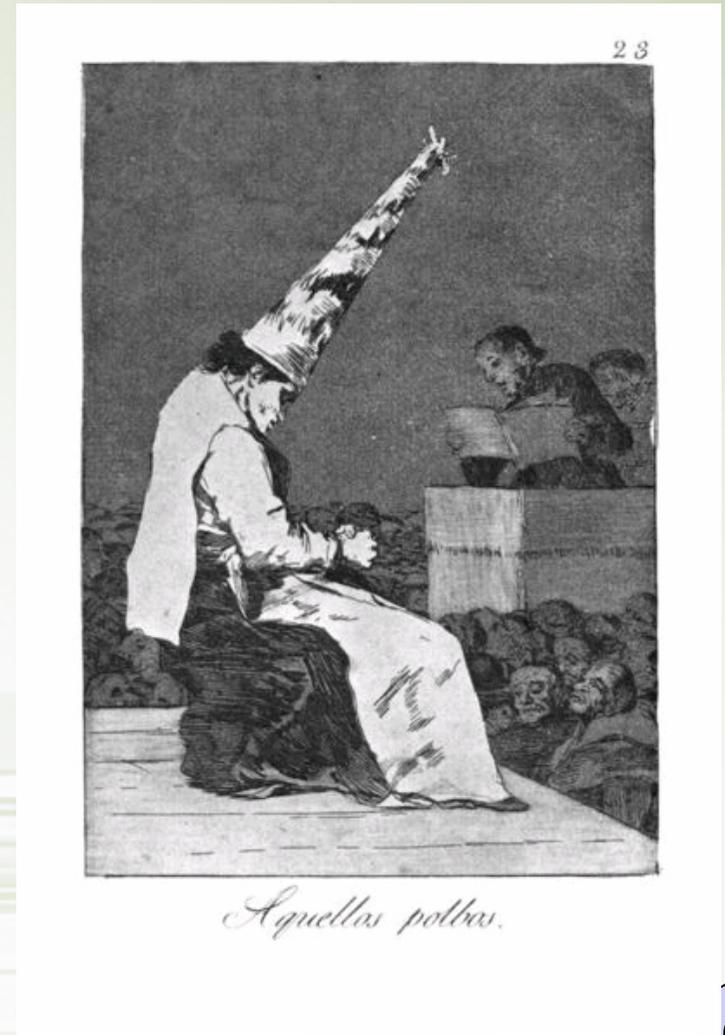
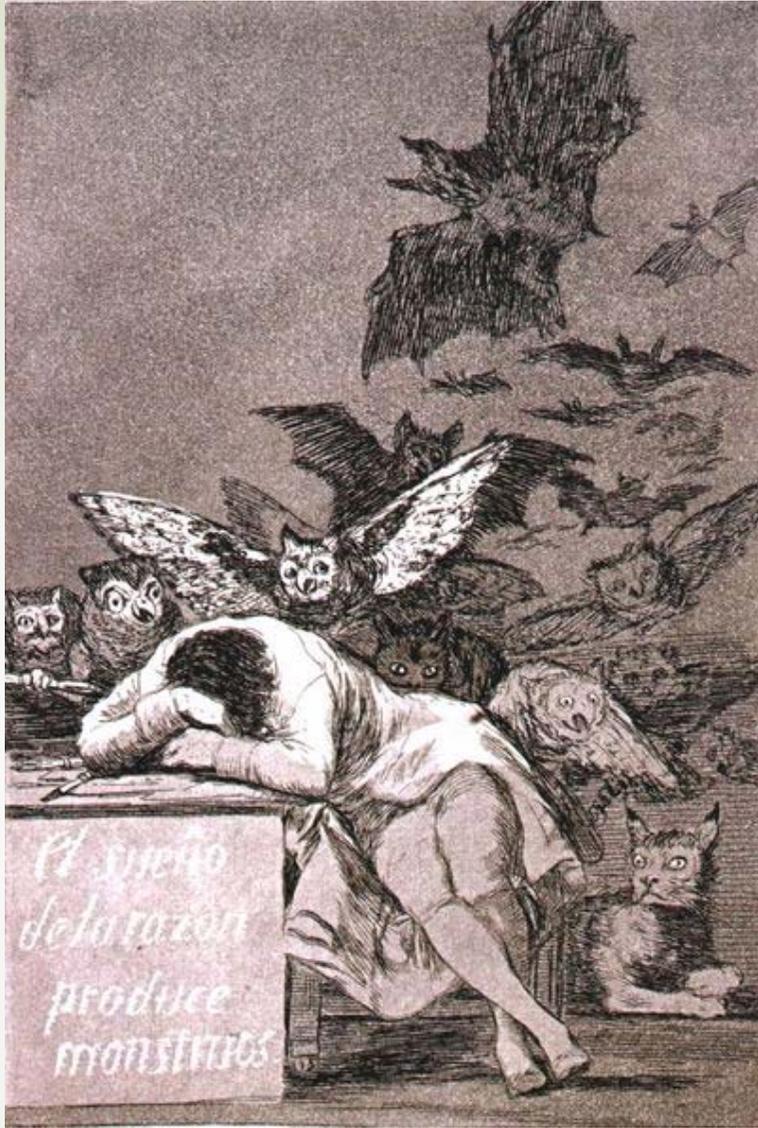


# 版画集『ロス・カプリーチョス(気まぐれ)』

- 1799年2月6日付け『マドリッド日報』の記事(広告文)

《人間の不正や悪徳を批判するのは、弁論や思想に固有の領域と考えられる。だが同時に、絵画の対象にもなりえるのだと確信し、作者(ゴヤ)はその信念のもとにテーマを選んだ。つまり、社会に共通にして見られる常軌を逸した愚行、無知蒙昧のゆえに認められている偏見や虚偽のなかから嘲笑の材料になりやすく、また作者の幻想を働かせたものが選ばれている。》

※教会や異端審問所の風刺



*Aquellas polbas.*

# 『ロス・カプリーチョス』の国王への献呈

- 1803年7月7日、ゴヤは財務大臣のもとへ出向いて、国王への同版画献上を申し出る。

《私の描きました『ロス・カプリーチョス』は80枚の銅版画であります。1冊につき金1オンスで2日間だけ販売しましたところ、27冊売れました。原版からは5万枚ないし6万枚は印刷できます。外国人たちはこれらの版画を欲しがって躍起となっております。私の死後、勝手に復刻されるのを懸念して国王陛下に謙譲いたしたく存じます。その見返りに、愚息フランシスコ・ハビエルに外国修業のために年金を賜りとうございます。》

⇒10月6日、版画の受納とハビエルへの年金12000レアルを通達。

※『ロス・カプリーチョス』は、半世紀にわたって埋もれる。第二版は1855年である。



「チンチョン伯爵夫人」、「カルロス4世の家族」、「バルコニーのマハたち」





- 遠近法、物語性、焦点の排除

《「カルロス4世の家族」は、18世紀末の王権の危機に対して、反対者たちによって広められた噂を認めない王家の家族像で応えたものである。その親密さを誇張することも甘くすることもなく、この家族は一体化された態度を示している。・・・ゴヤは、歴史的事象と宮廷の陰謀に満ちた世俗的な儂い世界の中にこの一家を置く。配偶者と長男に挟まれ、親族に囲まれて、女家長が家族の中心に立つことによって、王権と男女関係の両方の秩序が復元されているのである。》（トムリンソン、104頁）

# 「食人種」



# 「マヌエル・ゴドイ」



「フランシスカ・サバーサ・イ・ガルシア」



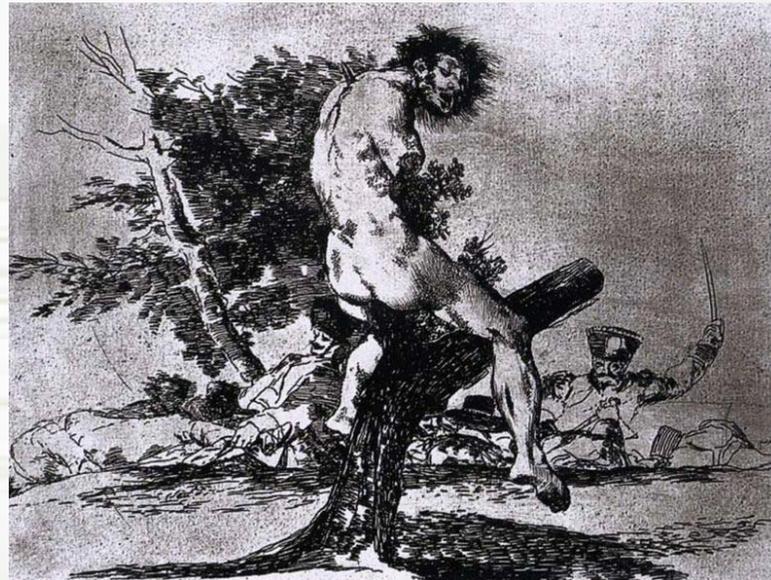
「イサベル・デ・ポルセール」



# 「巨人」



# 版画集『戦争の惨禍』



# 「マドリード市の寓意」



# 「スペイン、時間、歴史」 <または、「真理、時間、歴史（1812年憲法の寓意）」>



# 「弱の埋葬」



# 「精神病院」

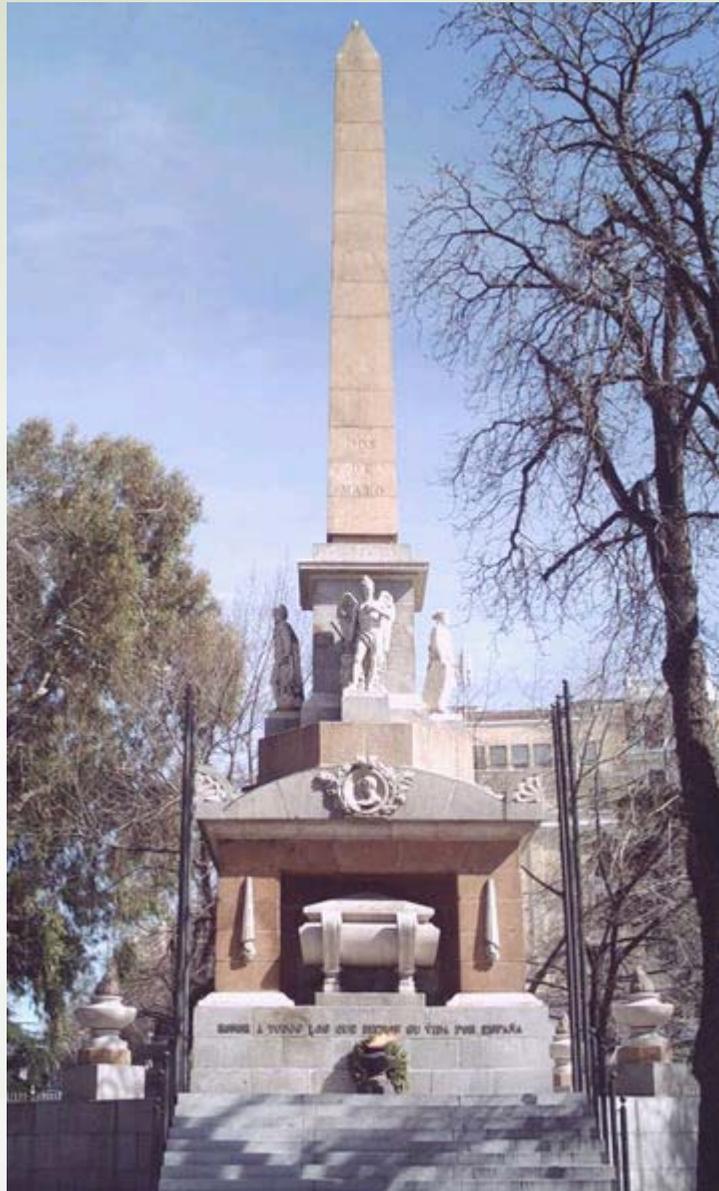


「1808年5月2日」





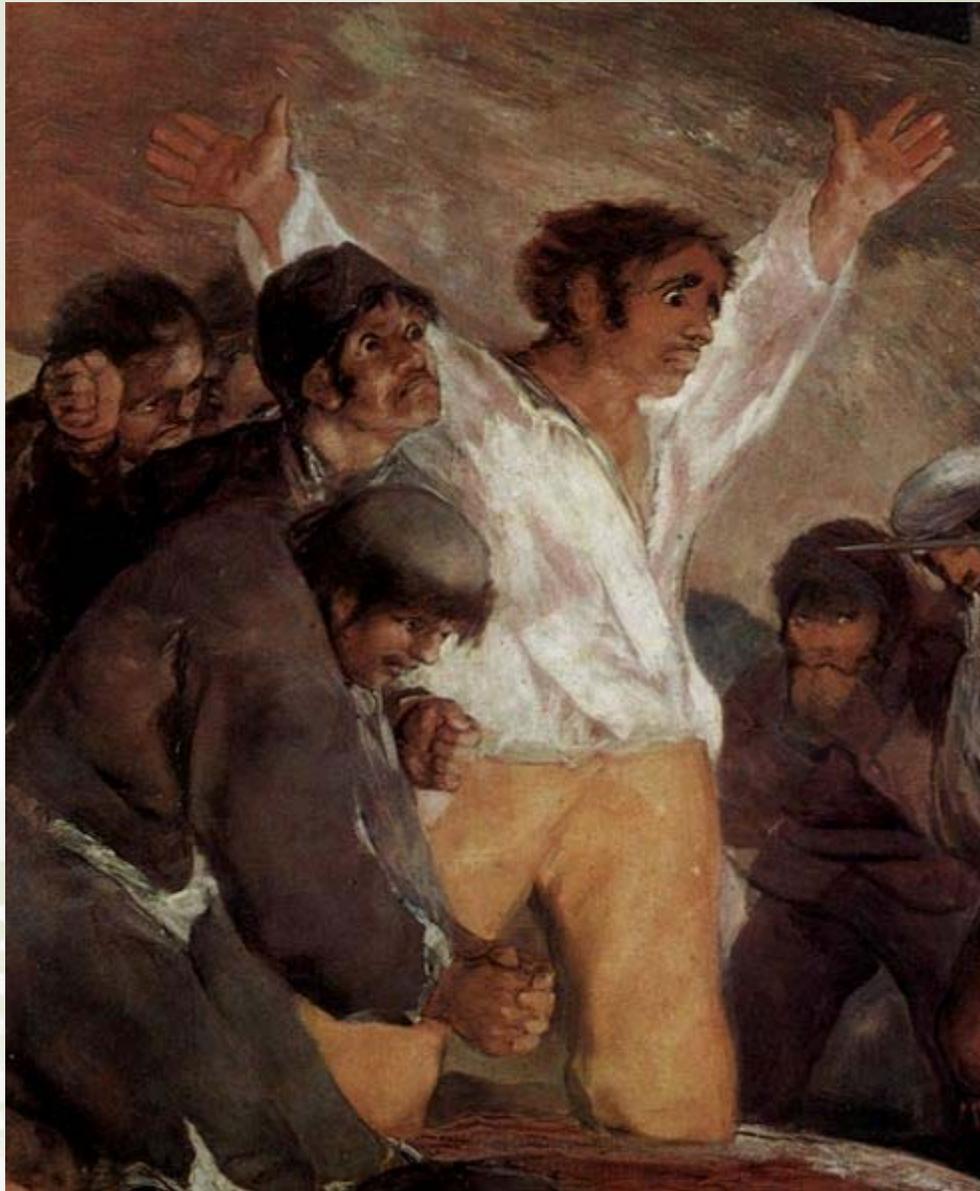
参考図1 ホセ・リベラス/アレハンドロ・ブランコ作「1808年5月2日」より〈プエルタ・デル・ソ  
ルでフランス兵と闘うスペイン人〉(1814年) 参考図1、2はゴヤにヒントを与えたと思われる版画。

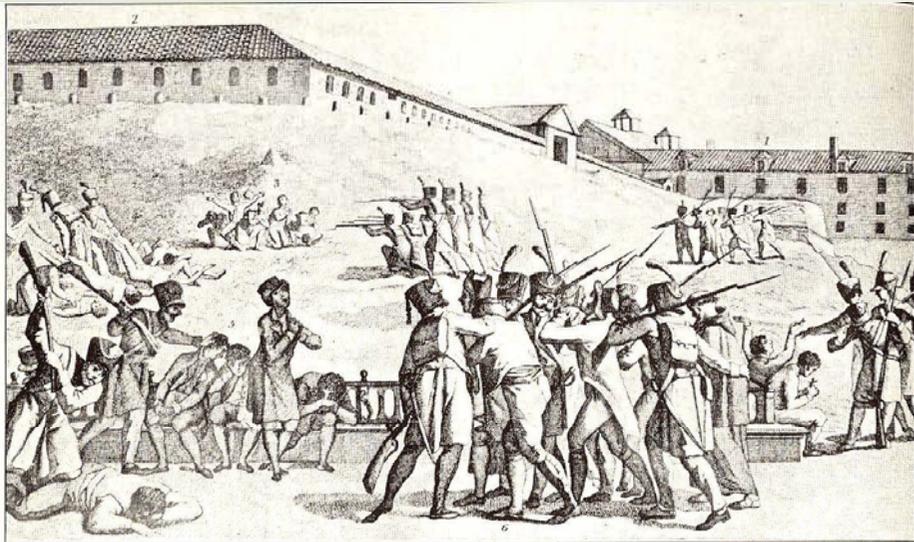




「1818年5月3日」







『1808年5月2日と5月3日の犠牲者たち』(19世紀の版画作者不明)

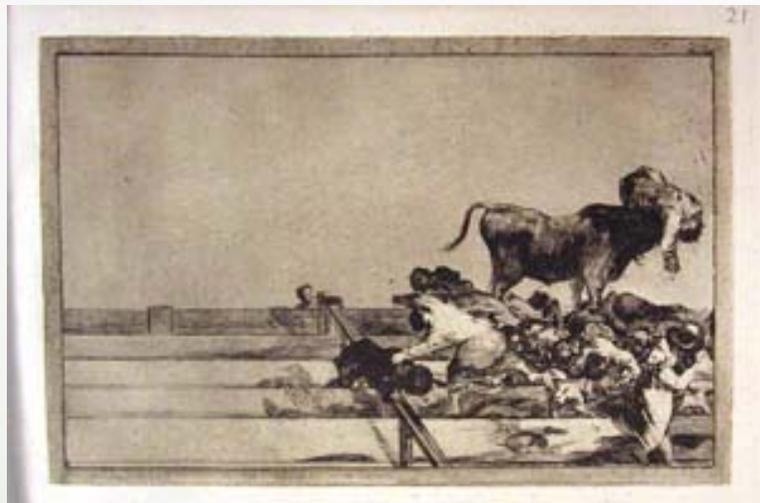
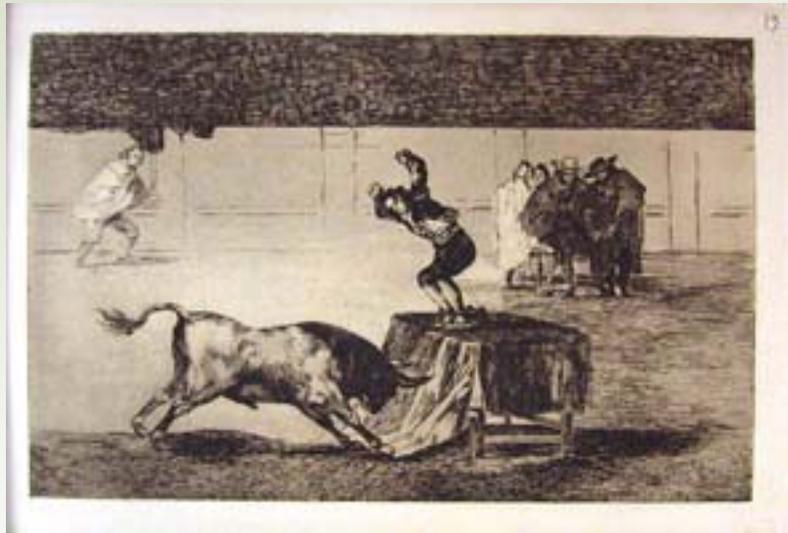


『ムルビエドロにおける僧侶たちの銃殺』(ミゲル・ガンボリーノの版画1813年)

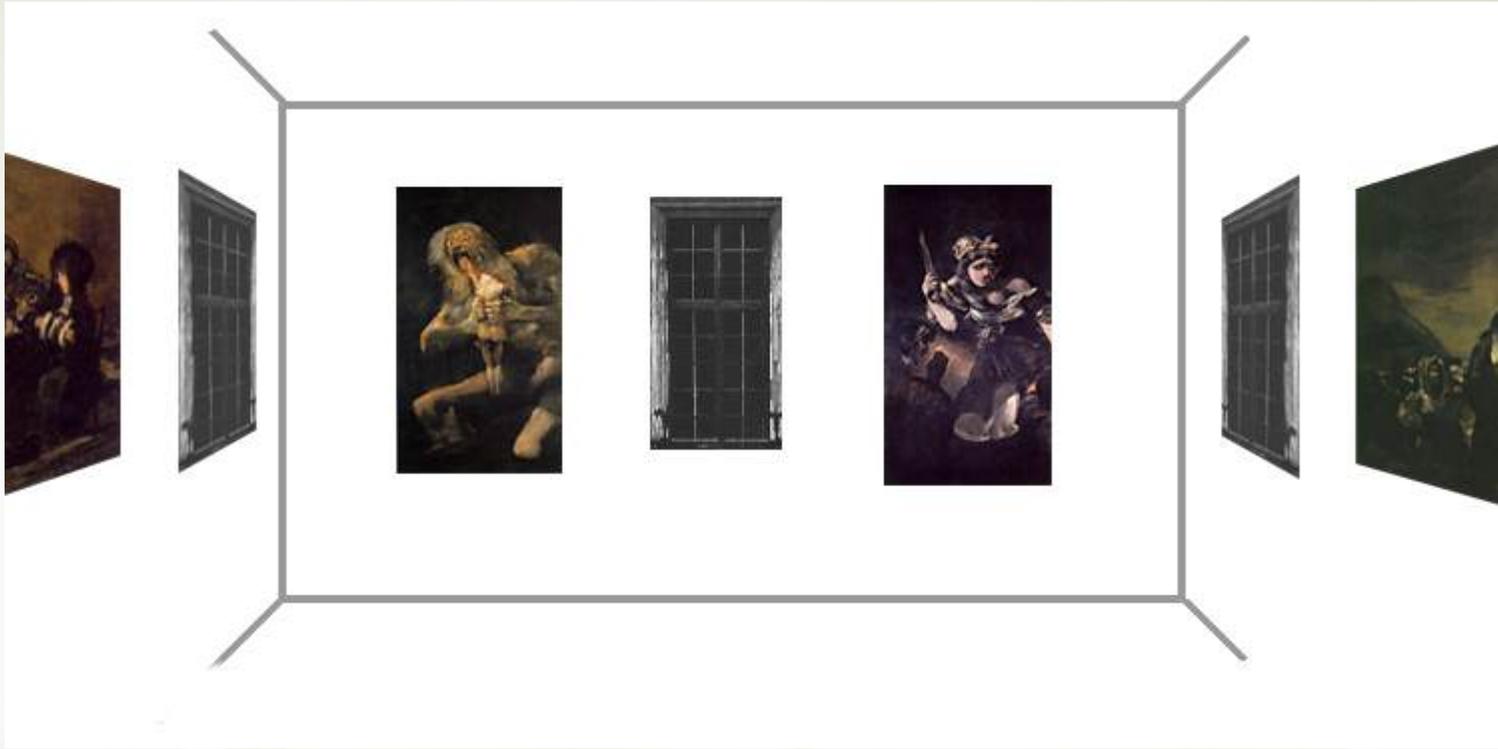
# 「野営中のフェルナンド7世」



# 版画集『ラ・タウロマキア(闘牛)』



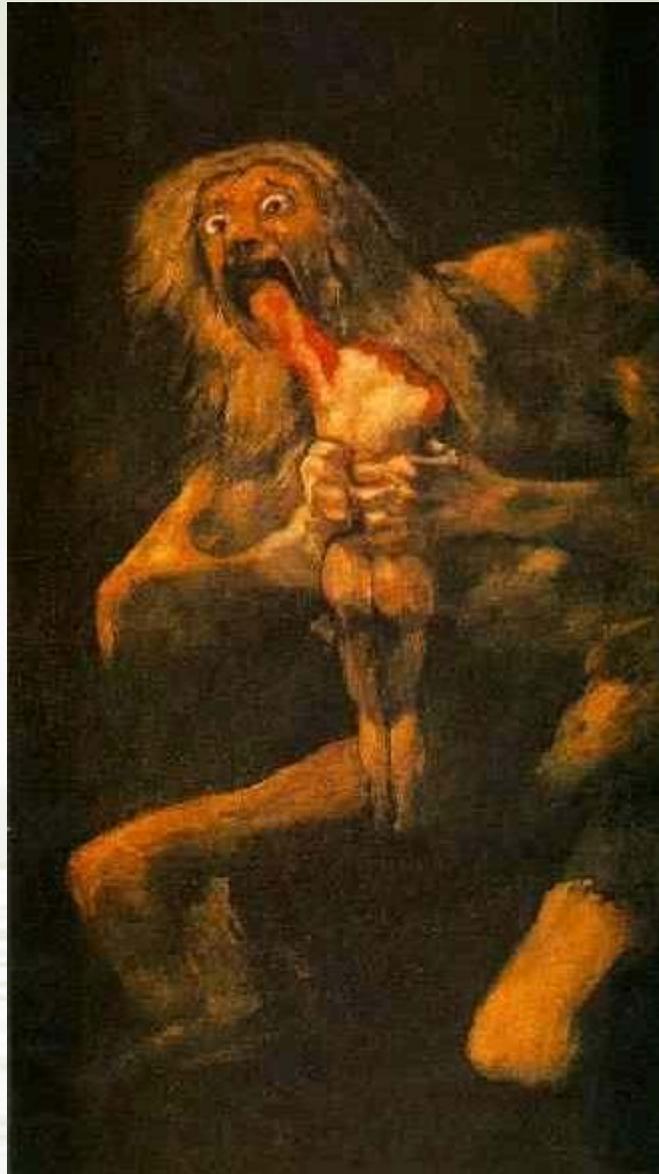
# 『黒い絵』（「聾者の家」に描かれた14枚の絵）











# 版画集『ロス・ディスパラーテス(妄)』



arteHistoria



arteHistoria



arteHistoria



arteHistoria

# 石版画集『ボルドーの闘牛』



# 「ボルドーのミルク売り娘」



Juan Bautista de Muguiro

Fecha: 1827

Museo: [Museo del Prado](#)

Características: 101 x 89 cm. Material: [Oleo sobre lienzo](#)



José Pío de Molina  
(Hacia 1827-1828).

*Óleo sobre lienzo.*

60 x 50 cm.

Colección Oskar  
Reinhart (Winterthur,  
Suiza).



サン・アントニオ・デ・  
ラ・フロリーダ聖堂



# 伝統と革新が交錯した時代、 そして戦争……

立石博高  
東京外国語大学教授(スペイン史)

スペイン史の碩学P・ヴィーラルが指摘するように、スペイン帝国の繁栄の時代を描いた画家がベラスケスであるとすれば、旧体制の危機と崩壊の劇的な時代を描いた画家がゴヤである。

この天才の絵筆の対象は、自己を取り巻く社会状況の諸相に及んでいる。あるときは民衆の喜びや悲しみが、べつときは宮廷人の優雅さや退廃が描かれている。またあるときは敬虔な宗教画が描かれ、べつときは異端審問所や修道士たちが諷刺的に描かれている。したがって、ゴヤの作品をよりよく理解するためには、この激動の時代の歴史的特徴をつかむことが不可欠であろう。以下、簡単に粗描したい。

## 高まる 民衆の動き

ゴヤが生きた十八世紀半ばから十九世紀初めの時代は、まさに古いものと新しいもの、伝統と革新とが交錯しながら、封建的な体制が崩れ自由主義的



息子のカルロス四世が即位するが、上からの改革を執行するわけにはいかなかった。一七八九年フランス革命が勃発し、スペインは隣国からの革命の波を押し止めるために全ての努力を傾注せねばならなくなった。「防衛線」と呼ばれる厳しい監視体制が国境に設けられ、異端審問所は不穏な出版物の取締り機関としてその息を吹き返したのである。しかも一七九二年には、王妃マリア・ルイーサの寵愛を受けたゴディという人物が、一介の近衛兵士から宰相へと昇格してしまう。啓蒙派官僚は

な体制が生まれようとする時代であった。彼が二十歳の誕生日を迎えようとする一週間前の一七六六年三月、十三日には、滞在していたマドリッドで激しい都市暴動(エスキラチエ暴動)が起きている。食糧の高騰と、ときの

大蔵大臣エスキラチエの進める服装取締りを含む強引な首都整備の方策に反発した住民が、王宮を取り囲み、食糧価格引き下げやエスキラチエの罷免に成功したのである。これはスペイン絶対君主に対して民衆がその要求を飲ませることのできた初めての事件であり、以後のスペインの歴史は民衆の動きを捨象しては語れなくなっていく。

この数年間、英仏の七年戦争にフランス側に立つて介入し、スペインは軍事的に手痛い敗北を喫していた。イギリスの進出に抗してこのまま広大なアメリカ植民地を維持していくのが困難なことは、誰の目にも明らかであった。対外的にも国内的にもスペインは王国改革を進める必要があることを痛感

行き場を失い、旧体制の秩序を批判する啓蒙は閉塞状態に陥った。カトリックの啓蒙が目指した教会の醇化も頓挫し、以後、教会批判は体制批判と同一視されてしまう。  
ゴディは、フランスと交戦するが敗れて一七九五年バゼル条約を結び、その後はアメリカ植民地の保持を優先課題としてフランスと接近してギリシアと対抗する。ナポレオンも同盟を重視するゴディは、一八〇四年フランスの対英戦争に参加するが、翌年フランス・スペイン連合艦隊はララファルガの海戦で壊滅させられた。

## スペイン国内の混乱に乗じた ナポレオン

凡庸な国王カルロス四世、身持ちの悪い王妃マリア・ルイーサ、寵愛を受け独裁政治を行うゴディの三位一体は、スペイン国民の激しい反感を買うようになった。ゴディは危機に瀕する国庫を救うために聖俗の貴族の特権を制限せざるを得ず、このことは伝統の特権階級を皇太子フェルナンド支持へと向かわせた。一八〇八年三月、守旧の貴族は、ゴディに不満をもつ民衆を扇動してカルロスの退位とゴディ失脚を勝ち取り、フェルナンド七世の即位に成功した(アララフエス暴動)。しかし、その数日後、身の安全を確保したカルロスはその讓位を撤回した。  
一八〇七年のゴディとの秘密条約でスペイン領内に兵を進めていたナポレオンは、こうしたスペイン国内の混乱

させられたのである。十八世紀後半のスペインもまた、ヨーロッパの後進国として、啓蒙思想の影響を受けながら「上からの改革」を行おうとする啓蒙改革の時代に入っていく。

ときの国王カルロス三世は、狩りを愛好し自ら政治に関わることの少ない君主であったが、すぐれた啓蒙改革派官僚を登用する術を知っていた。エスキラチエ暴動のあと実権を握ったアララダ伯は、カンポマネス、オリビエラの協力を得て次々と重要な施策の実現にのりだした。守旧的貴族と結びつくイエズス会の国外追放が断行され、異端審問所の権限が縮小され、教会の土地財産を制限する動きも強まった。

シエラ・モレーナ地域の開拓事業に着手し、各地に「祖国の友縁協会の設けて啓蒙的知識・技術の普及が進められた。アメリカ植民地との貿易活性化のために、カデイスの貿易独占が廃止されて、本国と植民地の貿易自由化が実現した。農業保護・振興の方策も立

に乗じて、一八〇八年五月、父と息子とともに退位させ、自分の兄ジョゼフをスペイン国王ホセ一世として即位させることに成功した。しかしながら、スペイン国民がすべてこの事態を諸々と受け入れたわけではなかった。啓蒙思想の影響を受けていた知識人は二つに分裂した。ナポレオンの圧倒的な力をまなして、モラティン、カパルスの親フランス派(フランセサード)はその力を借りて運んだスペインの近代化を行おうとした。ホベリヤノスらは、あらたな自由主義の世とともに、フランス勢力に対抗しながら、スペインに立憲君主制を樹立しようとした。そしてモラティンともホベリヤノスとも親交のあったゴヤは、さしあたり政治的態度を表明せず、事態の推移を見守りながら戦争の残酷さを見据えていた。他方、伝統的貴族・聖職者も二つに分かれた。新土ホセ一世のもとで特権を維持しようとする者たちと、フランス勢力の侵略に抗しようとする者たちであった。

## 血生臭い戦いは ゴヤの版面に

しかし、何よりも民衆が、自分たちの生活の場を蹂躪し、横暴に振る舞うフランス軍隊に反発した。最初の事件は、一八〇八年五月、日マドリッドの民衆による駐屯フランス部隊に対する蜂起であった。そしてこれに呼応するかのように各地の民衆は、旧体制への不満を抱きながらも、聖職者の説教に

てられ、農業利害と対立する移動牧畜業者組合メスタの諸特権が削減された。カトリック的啓蒙も頓挫

こうした啓蒙改革は、かつては自由主義・反聖職者主義と伝統主義・カトリック擁護の「二つのスペイン」の対抗として近代化の過程を描こうとした保守的歴史家たちによって、反教會的・反宗教的性格のものだと主張されていた。だが、最近では「カトリック的啓蒙」と称されるように、それは国王教権主義に立ちつつ、外見的・パロディ的な儀礼を廢して内面的信仰を重視した——したがって教會の華美、聖職者の墮落、民衆の迷信的帰依を鋭く批判した——ものだとして受けとめられていた。ゴヤの宗教画のもつ敬虔さと異端審問所などへの辛辣な諷刺は、このカトリック的啓蒙の流れに位置するものである。

一七八八年カルロス三世が死去し、嘆かれて、自分たちの生活、さらに生存までも危うくする侵略者「不敬虔で無神論的」フランス勢力に対して戦ったのであるアララド。このスペイン独立戦争すなわちフランス軍隊と国王、宗教、祖国万歳——を叫ぶ民衆と血生臭い戦いは、ゴヤの版面「戦争の惨禍」に冷徹に描かれている。

一八一四年、ナポレオン軍は敗退し、フェルナンド七世が国王復讐を果たす。絶対主義者の支持を受けた国王は、独立戦争のさなか自由主義者たちが制定したカデイス憲法(一八二二年憲法)を廢止し、スペインの近代化を望んだ自由主義勢力の努力は水泡に帰した。さらに、親フランス派だけではなく、自由主義者も弾圧し、異端審問所や封建的諸制度をすべて復活させてしまう。ゴヤは、自ら進んで愛国派たることを証明しようとして、「五月一日」と「五月三日」の大作を描く。だが、フェルナンド七世の絶対主義体制のもと、宮廷から疎んじられることになった。

一八〇一年リエージュを指導者とするプロシアンシメント(クーデター)宣言が成功し、ふたたび自由主義者が権力を掌握、カデイス憲法を復活させた。しかしウィーン反動体制下の列強が武力干渉を行って、一八三三年自由主義政府は瓦解する。そして再度スペインはフェルナンド七世の反動的統治に苦しむことになる(「思ひむべき十年間」)。ゴヤは一八二四年祖国を離れ、そのまま戻ることなく、ポルドーで一八二八年に客死する。

